

神戸・阪神間を1967（昭和42）年に襲った六甲山系豪雨災害から7月で50年になるのに合わせ、「六甲山の治山・森づくりシンポジウム」が13日、神戸市中央区下山手通4、県公館で開かれた。約350人が参加し、減災への道筋を考えた。（金 慶順）

六甲山系豪雨、教訓学ぶ

神戸 発生50年でシンポ



六甲山系の災害と治山の歴史について講演する神戸大学の沖村孝名誉教授＝県公館

67年、六甲山系を集中豪雨が襲い、土砂崩れなどで県内の98人が犠牲になった。その教訓を伝えようと、県や神戸・阪神間の自治体、神戸新聞社などでつくる実行委がシンポジウムを開催。実行委は本年度、

訓練や展示なども実施する。基調講演では神戸大の沖村孝名誉教授（73）が六甲山系の災害と治山の歴史、今後の森づくりについて話した。六甲山系では38（昭和13）

年にも、600人超が亡くなる阪神大水害があったが、その後の対策で、67年の豪雨では市街地への土砂流入を1割程度に抑えられたという。

沖村教授は「砂防ダムの効果があった」と評価。一方で宇治川などの未整備だった小さな河川、小さな急傾斜地で被害が多かった。近年は強い雨が短時間、

局所的に降るため、土砂災害を防ぐ木や草、根の力など「森づくり」が欠かせないと強調。「森づくりは生きる力を培う一つの手段」とし、市民で減災を進められるとした。

続いて県六甲治山事務所の元職員や森林ボランティア、防災士が自助・共助・公助の視点で現場での経験を報告。パネルディスカッションもあった。